

## 最新の劇場から舞台技術について学ぶ—札幌文化芸術劇場hitaru—

2月7日(木)15:30~17:30 センター棟 309号室

[講師] 伊藤久幸 ( (公財) 札幌市芸術文化財団 文化交流プラザ事業部 舞台技術部長 )  
[モデレーター] 草加叔也 ( (公社) 全国公立文化施設協会 アドバイザー )

○草加氏 お待たせをいたしました。舞台技術関連講座の最後の研修を始めさせていただきます。

タイトルにありますように「最新の劇場から舞台技術について学ぶ」ということで、札幌文化芸術劇場についてご紹介をさせていただきます。

皆さんもご存じの通り、2,300の客席数を誇る最近できた劇場の中では一番大きな施設だということと、ひょとするとわが国では最後になるかもしれませんが、副舞台として奥舞台まで持っている大型の文化芸術施設が昨年オープンしました。

詳細について、お手元の資料にありますように今日は札幌文化芸術劇場の伊藤さんにお越しをいただいています。正式には公益財団法人札幌市芸術文化財団文化交流プラザ事業部舞台技術部長です。

伊藤さんをご存じの方も多いと思いますが、札幌に行かれる前は新国立劇場の技術部長をお務めでした。私は新国立劇場の前に関わっていた銀座セゾン劇場を開けたときから一緒にいろんなお仕事をさせていただくようになりまして、新国立劇場でもお世話になりましたし、札幌もつい先日、現物の劇場を拝見させていただきました。

ここからは、伊藤さんにマイクを委ねます。少し最後に質疑の時間をとってほしいという願いをしておりますので、もし聞きたいことがたくさんあると思いますので、そのときに聞いていただければと思います。

では、伊藤さんよろしく願いいたします。

○伊藤氏 改めまして、伊藤と申します。よろしく願いいたします。

札幌文化芸術劇場というのは、去年の10月にオープンしまして、そこでのことや、草加さんのほうからも紹介もありましたけれども、東京にいて、その後札幌に移って、似たような劇場ですけれども、二つ作らせていただきました。

その中で、どういうことを思って、どういうことをやって、どういうことができなくて、今こうなっています。こういう目標をちょっと持っていますみたいなことを少し時間をいただきながらお話しできればいいかなと思っています。お付き合いのほどよろしく願いいたします。

少しだけ時間をいただいて、自己紹介をさせていただきます。主だったというところで、一番最初は歌舞伎座に入りまして、その後フリーの舞台監督をやって、新国立劇場に入りまして、今、札

幌文化芸術劇場にあります。

ちょうど二十歳のときから約2年間ほど、今銀座にあります歌舞伎座に長谷川大道具というのが当時ありまして、あそこの門を叩いて、何もわからずに歌舞伎の世界から入って約2年間、それからフリーの舞台監督、演出部というカテゴリーで食べてきました。

主には、最後の8年間ぐらいは仲代達矢さんが主宰されています無名塾にずっとついていたり、当時、博品館というところがありまして、あそこでも年に2本ぐらい仕事をいただいて、「リトルショップ・オブ・ホラーズ」とか「キャバレー」とか、「上海バンスキング」とか幾つかありました。

あとは銀座セゾン劇場、先ほど草加さんの話もあったんですけども、立ち上げから参加させていただいて、ピーター・ブルック、マールイドラマシアターとか、諸々やらせていただきました。あとイベント関係では、幕張メッセとか宮崎のシーガイア、そのオープニングセレモニーということで、1カ月近くそれぞれのところでオープニングの手伝い等々、イベントを作っていくことをやっておりました。

新国立劇場には、フリーの舞台監督を辞めて、1994年、運営財団というのがありまして、そこに入りました。ちょうど劇場が建つ3年前ですね。そのときから僕が舞台機構のほうのいわゆる、アドバイザーから始まって、舞台のほうで直接働くというところをやっていました。

先ほど隣の1時からの講演では、今こちらにもいます渡邊邦男さんが音響のほうで活躍されて、新国立劇場を立ち上げて、仕事をしていました。

2007年から16年までは技術部長としてやらせていただいて、1月末に新国をやめまして、16年4月からとは書いてあるんですけども、一応2月からアドバイザーという形で札幌文化芸術劇場のほうにお世話になって、諸々動かさせてもらっています。

新国のときに約3年前から、札幌文化芸術劇場は大体2年半ぐらい前からいろいろと凶面、あとは舞台機構とか音響、照明も含めて、いろいろこういうふうにしたとか、ああいうふうにしたほうがいいんじゃないかとかというのを言わせていただいて、去年の10月、オペラ「アイダ」にて一応無事こけら落としができました。

そんな内容で、今日時間をいただいて、札幌文化芸術劇場と、あと新国とか東京とかというところを少し比べつつ、どういうことが今起こったか、起こっているかというのをちょっとお話ししていきたいかなと思っています。よろしく願いいたします。

今日はせっかくですので、数枚北海道自慢じゃないですけども、お土産持ってきたほうがいいかなと思ひまして、写真撮ってまいりました。

これは支笏湖というところでありまして。非常にきれいな場所なので、皆さんお時間あるときに北

北海道に遊びに来てください。よろしくお願いします。

本題に入りたいと思います。施設紹介をさせていただいて、オープン前の作業とか新国と札幌、これは劇場としてどういうところが違って、こういうことができた、できなかった。今度は地域として東京と札幌、どういう違いがあって、どういうふうになっているかとか、あとは最後、お時間の許す限り札幌でのいわゆる目標という感じで幾つか持ってきていますので、それも含めてよろしくお願ひしたいかなと思っております。

それでは、今お手元に施設の概要としてあると思いますけども、それをちょっと見ていただきながら、少しだけお時間いただきたいかなと思っております。

(施設案内のパンフレットを見ながら) 今、こういう冊子がありまして、その中に写真がありまして、ちょうど向かって右側ですね。低層棟と高層棟というふうに言われています。新国のときでも低層棟、高層棟と呼ばれていましたけれども、低層棟のほうに劇場が入ってまして、高層棟のほうには、今回は複合ビルですけども、HTBというテレビ局が入っております。その2つが入ってまして、僕らのほうのいわゆる創世スクエアという建物が構成されております。

ページをめくっていただきますと、大劇場のイメージ図です。一番最初に作ったときのイメージ図なので、バレエなのかオペラなのか、その辺の細かいところはちょっと突っ込みはしないでいただいて、こういう感じの内装で見えていきますと。オーケストラピットがありまして、後ろで上演していますよという様子のイメージです。

ロビーとかのホワイエの空間のイメージもあります。次のページにはクリエイティブスタジオという名前です。これは僕からすると、いわゆる小劇場が半分、それと稽古場が半分という感じのものです。完全に小劇場をうたって劇場として成り立っているわけではないんですけども、原設計としては大練習室、そういう名前で一番最初できました。それは少しいじってというのは、ちょっとまた後ほどお話しいたします。

これは、大きい劇場のほうの平面図です。新国立劇場をご存じの方はかなり似ているのではないかなという感じのふうに見えるかなと思います。下手のほうが若干袖としては狭いんですけども、これで主舞台に仮に10間四方をとりますと、奥舞台と上手舞台のほうには10間、10間の空間がとれています。後ほど出てきますけれども、ここはある程度多くの演出を、演目をできるようにということで、音響反射板が入っています。これは後ほどビデオ持ってきましたので、どんなふうに組み上がっているか、組み上がるかというのをちょっと早回しで見ていきたいかなと思っております。

これが断面です。ちょっと小さくて申しわけございません。すのこまでが大体30メートル、額縁の高さは14メートルですので、新国よりも大分、たっぱ的には高いです。それと、すのこまで

も約 30 メートルありますので、ほぼほぼこれも同じぐらいあります。オーケストラピットのこと  
もほぼ同じぐらいのスペースがとれていまして、かなり似ているイメージの劇場ができたというふ  
うに思っただけでも間違いないかなと思っております。

これは、先ほどのクリエイティブスタジオという大練習室、（大練習室）と書いてあるんですが、  
札幌市の原案では大練習室という名前で、後々、このロールバックの椅子を作っていたり、  
天井にグリッド天井を作っていたり、小劇場のようないわゆる演劇とかダンスとかそういう  
ものもできますというような空間になりました。ちょっと駆け足ですけども、1階、2階のイメ  
ージ図がございます。これちょっと後ほどまた見ていただいとしたいと思います。

それでは、先ほどの資料に戻りまして、1階、2階は、ここの建物はちょっと変わった様相があ  
りまして、図書・情報館というところとオープンスタジオというところと、いわゆる喫茶店・カフ  
ェがある3つの空間から成っております。

この図書・情報館というのは、またちょっと変わった図書館でして、本は実際には貸し出しをし  
ません。例えば普通の図書館ですと何か名作、三島由紀夫だったりシェークスピアだったり名作が  
ずらっとあって、それを数日間借りて、また返しに行くといふところなんですけども、ここはいわゆる  
そういう名作というのは置いていません。情報に特化したものですので、例えば週刊誌は全誌あ  
りますと。新聞も例えば 50 紙ありますとか。料理の本が例えばもう数百冊ありますとか。かなり  
特化したもので、この図書・情報館とオープンスタジオと中の喫茶店で読むようなことが可能にな  
っています。なので、本を借りるといふよりは持ち出しして喫茶店で本を読んでもよし、また、逆  
にコーヒーを買って、この図書・情報館のほうで飲みながら本を読んでもよしという、ちょっと変  
わったコンセプトになっています。

そこが1階、2階のほうに関しましては、図書・情報館のやや静かなコーナーがあって、そこで  
本が読めるようにはなっています。ただ、繰り返しですけども、図書・情報館という名前ですの  
で、やや騒がしいところで運営されています。例えばオープンスタジオでロックまではいかないで  
すけども、コンサートをやっていたり、ピアノを弾いていたりとかがあっても、その音はそのまま  
流れていきますので、そういう中での運営をしていきます。

これが1階のややにぎわっているというか、そういう形のところをちょっと写真を一、二カット  
撮ってきました。今、窓際のほうに見えるところはフリースペースです。ここがフリースペ  
ースで、学生さんたちが朝から夕方、夜まで割とここで勉強されているような、そんな空間になっ  
ております。ここが1階と2階になっています。これは劇場のホワイエのところから外を眺めるとテ  
レビ塔が見えますというのを、ちょっとピントがぼけていますけども、そんな写真をとりあえず持  
ってきました。

先ほどハードのほうだったんで、今度ちょっとソフトのほうを少しだけ見ていただければと思います。

一番最初、10月に「アイダ」という作品でこけら落としを行いました。このときは少し制作陣にこういう注文をつけまして、「アイダ」で開けるのであれば、札幌で初日を迎えるスケジュールで組んでくれと。

何を言っているかという、イタリアから来るカンパニーだったんですけれども、日本のどこかで開けたやつを札幌に持ってくると、これ、うまくいくのは確実に目に見えているんですけれども、そうすると、札幌滞在が多分5日とか6日とかすごい短い時間でできあがったものをスルーしていく感じの形になります。初日を迎えるスケジュールだと仕込みをしても無いものがあったり、舞台稽古を行ったり、そのために僕らとしては大体10日間、2週間近く劇場を押さえて、その中で仕込んで照明をつくって、諸々こうやってという空間と時間を使えたということが一番大きかったかなと思っています。

バレエのほうは新国立劇場から「白鳥の湖」を。これはもうほとんど買うという形でやったんですが、それよりもバレエの「カルミナ・ブラーナ」、これは札幌舞踊会というのがありまして、その団体と制作協力して、僕らは技術的なことを提供し、札幌舞踊会は中身のほうをつくるということでやってもらいました。

「シティ・ジャズ」と書いたんですけれども、今までは大通公園というのが近くにありまして、そこでテントを張って約3週間から1カ月ぐらいジャズをやっていたのですが、それを劇場の中に持ってきました。先ほどの平面の奥舞台のところにステージを組んで、主舞台のところに400席の仮設の客席を作り、下手側に飲食、ちょっとしたこういうドリンクと、それと簡単なおつまみ程度、それを提供して主舞台上でお客さんが飲食しながらジャズを見られる、聞けるというような状況を作ってみました。あとは演劇で「ゴドーを待ちながら」というのを札幌演劇財団というところと同じく提携をしてやりました。

言葉だけですとちょっとわかりにくいかなと思いますので、実はオープニングセレモニーというのが、「アイダ」のゲネプロが終わって1日空いて、翌日が初日という中1日のところでオープニングセレモニーをやりました。「アイダ」のセットを若干片づけて式典をやったんですけども、そのときに流した映像、約10分間ぐらいありますので、ちょっと見ていただきたいかなと思います。

#### 【映像】

○伊藤氏 ありがとうございます。

今見ていただいた約10分間のビデオで、大体僕のこのパンフレット等々の説明ができています

は思っていますので、またお時間のあるときに、今日の資料をちょっと見ていただきながらとは僕は思います。

それでは、1つここで言おうと思っていたことを言わせてください。

劇場の絵をぐうっと撮っている、あの動く映像なんですけれども、あれドローンなんですよね。ドローンにカメラをつけて、それで客席からぐうっと舞台に降りていくとか、逆に舞台のほうからぐうっと客席に向かって離れながらああいう映像を撮る。

これは質問でも宿題でもないんですけども、僕らがもし劇場である演目のときに、ドローンを使って演出をしたいんだといわれた場合にどう対処するかは、何か一緒になって考えておいたほうがいいかなと、撮りのときにちょっと思っていました。確実に後ろにスクリーンを吊って、演者をそこに映したいと。それはこういうカメラじゃなくてドローン飛ばしてやりたいんだけどなということがあったとき、僕らどうすべきかなとそのとき思いました。まだ正解にも何もたどり着いてはおりません。

話を戻します。オープニング前の作業ということで、幾つか持ってきました。

まず地震のことからなんですけれども、避けては通れないかなと思ひまして、まず地震のこと。それとトレーニング、これは僕ら技術者と、あと避難であるとか、別なソフトであるとか、そういうトレーニング。それと、避難訓練、その辺を含めてオープニング前の作業として幾つか持ってきました。

まずは地震の話なんですけれども、昨年9月6日、夜の3時ぐらい、北海道胆振東部地震ということで、かなり大きな被害が出ました。僕は当然のことながらその時間なので、普通に寝ていたんですけども、実は僕は震災2回目で、3.11のときは新国立劇場で経験をして、この前の9月6日は札幌で経験をしました。寝ていて、揺れが当然ながら来るんですけども、やはり3.11のときのようなすごく気持ちの悪い揺れ方で、時間が長いんですね。あ、これは結構でかいかなと。向こうのほうで何か本が落ちる音とか瓶が倒れるような音がしているんですけど、まだ時計を見たら3時ぐらいで外も真っ暗だったので、ちょっと明るくなってからとは思って、明るくなるまで待って、出かけていったんですけども、朝の6時ごろ劇場に歩いて行ったのですが、信号が消えていたんです。これ見た瞬間に、これはでかいと思って、そのまま劇場に行きました。

(写真をいくつか見ながら) これは昼過ぎからの写真を数カット持ってきたんですけども、まだこれはオープン前です。オープン前の9月6日のこれで何時ぐらいかな、昼過ぎから夕方ぐらいだと思ふんですけども、大体400人から500人ぐらいの方々が集まり、帰宅困難以上の感じの困難な状態で、要は泊まっているホテルから出されてしまった方とか、もうこれから行く場所がないんだと非常に困っているという方がいらっしやって、受け入れ態勢をまずとりました。

1階、2階はこのような感じで、椅子を並べてとりあえず待機していただいて、これはまあ2階の上のほうから撮った写真です。

それで、これは充電器になんです。ちょうど僕らの施設ありがたいことに72時間自家発電が回って電気が送れますということで、全部のコンセントが使えるわけではないんですけども、一部使えるようになりまして、今番大事なものという携帯の充電じゃないかなというぐらい、このときかなりにぎわいました。各社各社の充電器をつないで、充電ある程度できたところでまた交代、また交代という感じで行いました。

これは水を配っているところ、それとこちらは夜、アルファ米といういわゆる非常食を配る、そういう作業をしたところの写真なんですけれども、これはさらにその夜、夜多分10時以降なんですけど、1階、2階の450名ぐらいの方々をあそこだと椅子で、下が硬い石なので、寒くて多分眠れないだろうということで、3階以上を開放しまして、このカーペットの上だったら多少まだ眠ることができるかなというところで、ここを開放して休んでいただきました。長い方で2泊、ここで過ごしております。これは3階のところでこんな状態で1晩、2晩を過ごしましたということです。

何の写真を撮ったかという、観光客が多い土地なので、このときは韓国語で2つ書いてもらいました。ごみ箱で生ごみと生ごみじゃない物とか、何かそういうことをちょっと含めて書いてもらったり、ここは日本語で左側の赤のところ、明日で終わりますよというのを、もうやはり英語だけでは賄い切れないので韓国語で書いていただいて、張っていただいて、それでアナウンスをしました。

ここで地震に対してなんですけれども、僕のほうは先ほど2回体験しましたということで、少しポイントをまとめてみました。

まず、情報を提供するというのが僕らとして、避難された方、自分たち含めてやりたいんですけども、実は意外に当事者ほど情報が少ないというのは感じました。理由としては、実は朝7時ぐらいですか、隣にいる草加さんから電話がありまして、「おい、そっち大丈夫かい」と。「えらいことになっているぞ、お前」みたいな形で電話あったんですけども、こっちは僕としてはまだ信号がついていないぐらいの情報しかないですよ。当然ながら自宅ではもう停電でテレビもつかないし、ラジオも実は僕持っていません。なので、情報が入ってこないんです。ネットを見ようにも、もう携帯の電池が少なくなって、どうやらでかい地震があつたらしいなぐらいで、会社に出るときに草加さんから電話があつて、「いや、実はテレビも何も見えないし、ラジオもないし、実は何が何だか全然わかんないんだよ」と言ったら、「じゃ、わかった。ニュースを送ってやるよ」と言って、すごい巨大な大きさのファイルを4つ送ってもらったんですけども、それを全部ダウンロードする間に僕のバッテリーが多分飛んじゃうんじゃないかなというぐらい。実は当事者ほど情報

が少ないかなと、これ思いました。

なので、まず皆々様に情報を与える前に、僕らもまず正確な情報を知る必要があるなど。じゃ、その電源がない中でどうやってするのか、それがまず一つ。

それと、先ほど写真でお見せしましたがけれども、携帯電話等の充電設備、まあ、等といってもほとんど携帯電話でいいのかなと思うんですけども、来られる方、来られる方、まずほとんどが携帯の充電したいんですけども、どこかこの辺の近くにありませんかということで、携帯の充電器を探されていました。

それと、まず居場所を提供するというのが僕らはすぐにできるかなと。例えばロビーであるとか客席であるとか、ある程度セキュリティー、行く場所を限って、ここは行っていいです、ここはだめですよというふうに区切れるのであれば居場所を提供できるのではないかなと。それがトイレとかにもつながるのではないかなと思っています。

3番目と似ているんですけども、飲食ができる環境を提供するということで、給湯室、ポット、こういうものがどのぐらい提供できるかどうか。例えば先ほどお伝えしたように、僕らの施設は72時間自家発電で電気が通っていますということなので、見ようと思えばテレビ見られます。つけようと思えばポットも使えますし、給湯室もお湯が出ます。ただ、給湯室から何か運ぶものがないと、インスタント何々というものを食べるためにはポットとか必要なので、それが結構必要かなとちょっと改めて思いました。

それと、ここはちょっと質問として投げかけたいところでもあるんですけども、僕は職員主導ではなくて、ボランティアを集めて先ほどのような空間と飲食等々の提供するということを積極的にやってみました。

どういうことかと言うと、先ほどの写真をそのままなんですけれども、これ今机の向こう側に立って水を配っている方、それとアルファ米にこれからお湯を注ごうという方、これは僕ら職員も入っていますけれども、職員だけではありません。先ほどの400人ぐらいの中からボランティアですみませんと言って、最初50人ぐらい来ていただいたんですけども、そこからまた、僕、選抜と言うとちょっとおこがましいですけどもお願いしまして、個々にちょっと声をかけて、この後、水配りしたいです。この後、アルファ米配りしたいです。この後、何々を提供したいですというのを積極的に運営等々参加してくださいということで、参加していただいた方々です。

ここは僕、各施設で避難、もしくはこういう有事のときには職員が率先してやり出す。これは当然ながらすばらしいと思うんですけども、ただ、僕らはそれに従事するためにそこにいるわけでもないかなというのはずっと昔から自問自答していました。今回は、それをちょっと違う形でボランティアを集めて、それで運用してみました。僕の中ではよくできたのではないかなと思っています。

ます。やはりボランティアの方々は自分たちのことなので、水を配るにしろ、アルファ米を配るにしろ、細かな気持ちがこもってやっていただいたと思っています。そういう形でやっています。

続いて、似たような話になるんですけども、劇場関係者はどうすればいいだろうか。例えばこれは新国のときもそうでした。仕事として残っている。けれども、家族がある方はみんな大事よね。じゃ、帰りたい人はまず優先的に帰して、残れる人だけ残って仕事をする。これがいい姿なのかどうなのか。これで、僕らは劇場の仕事が本当にそれでよかったのかどうかというのはちょっと改めてまた考えました。仕事を優先にとるのか、家族を優先して帰ってくれというのか、これは今からでも僕は各各の施設の方々が考えてもいいんじゃないかなと思っています。

最後の点は僕の反省です。

喉元過ぎればということで、あの後1カ月くらい一生懸命考えていたんですよ。お風呂入ったら、朝水を抜くと。それで何が守れるかということ、朝水がないということが免れるんですね。トイレに使えるかもしれないし、洗濯に使えるかもしれない。そうだよな。それはさすがにいい知恵だよなと。3週間ぐらいやったような気がします。喉元過ぎました。

防災バッグ、これも必要だよなと。リュック1個あれば、そこに靴から何から入れておけば3日、4日は過ごせるよねと。これも絶対いいよねと。すみません、作っていません。喉元過ぎるとやっぱりこういうふうになってしまうかなと。

なので、僕は非常に反省しています。

ただ、皆さんもこれできると思いますので、今日からでもとは言わないですけども、劇場だったらどうすればいいとか、ご自宅だったらどうすればいいとかというのは、いろいろあるんじゃないかなと思っています。以上、ちょっと2回目の地震に対して、2回過ごした段階で、僕の中でできたこと、できなかったことの反省点、少しまとめさせていただきました。

話題変わりました、トレーニングということで、大きく3つほど舞台技術系ということと公演系、それと避難訓練系ということで、ちょっと区切ってまいりました。

まず、舞台技術系なんですけれども、先ほど見ていただいたような、例えば大がかりな施設ですと、バトンも電動ですとか、照明も例えばデジタル卓ですとか、音響も同じようにかなりデジタルな形になっています。1週間や2週間で習得できるはずがない。

施設を僕らがまず普通に歩いて、あそこに行ってねと言うまでも、3日、4日じゃわからないというようなところなので、一応僕の中では計画を立てて13週間、約3カ月間ですけども、これが必要であるということを札幌市と、あと札幌の財団のほうにずっと訴えていきました。訴えていたのは、実は入ってすぐの頃なので、ほぼ2年半前から、ここの13週間というのは必要なんですよと、新国のときも実はこういうふうにはやっていたよということで期間をある程度押さえて

もらいました。

この期間が必要だということは、皆さんも重々おわかりだと思うんですけども、特に施設の規模が大きくなればなるほど、建築工事というのは押せ押せで1カ月から1カ月半ぐらい遅れるのが僕の中では想定内というふうに読んでいましたので、その辺も含めて13週間で絶対必要であるということをお話ししました。

この13週間で何を推さえたいかという、見学、撮影、取材というのがあります。常に開いていますということになると、全部受けちゃうんですよね。月曜の何時からこの見学が入っています。明日はこれが入っていますということになると、僕らがそこでトレーニングしたいんだけど、ちょっとすみません1時間待ちです、みたいな感じ。きょう夕方から取材があつて、夕方で終わりますみたいな感じになると計画ができないので、13週間でよいか悪いかは別として、この期間が必要ですよということで、逆に僕らが使えるところは外から入って来ないように、ある程度時間割を決めましょうということで抑制をしたかった。それが大きな目的でした。

それと、技術スタッフのシフト制開始というのは、とかく朝9時半から例えば5時半とか6時、土曜、日曜が休みで、また9時ぐらいから6時ぐらいまでという感じで、ある程度規則正しくいくと、僕らは本当は朝から夜まで、もしくは昼から夜まで働かなきゃいけないんですけども、6時ぐらい過ぎると疲れてきちゃうんですよね。何か帰りたいなとかちょっとそろそろ飲みたいなとか、そんな感じになるので、この13週間が始まることから、技術スタッフのほうはシフト制にして、土日も廃止して、遅番、早番を作って、例えば今日は9時から5時までは舞台機構、昼間の13時から22時が照明、音響は休みという形を約1カ月ぐらいはシフトを組んで、何か体に思い出し稽古じゃないですけどもやりました。

諸々最後の遅れというのは、先ほど建築もそうですし、やはりどうしても入札等々で備品を始め、かなり遅れてくるものがありますので、その辺はトレーニングに対して遅れてもいいようなというスケジュールをある程度組んでやっていました。

準備の公演系のほうなんですけれども、これは大きく僕の中では3つ分けて、先ほどの紹介ビデオにも入っていましたが、反響板がありました。それとオーケストラピットがありますということで、これはまずトレーニングをやらないといけないと思いました。地元札幌交響楽団というオーケストラがありまして、ここの力を借りて、オーケストラピットに入って約1日、舞台上で反響板を組んで約1日というスケジュールを組んでオーケストラピットはこういう問題があるんでいかがでしょうかとか、反響板ではこういうふうに飾るんですけどもいかがでしょうか、例えばピアノはどの辺に置いたらいいでしょうかなど、そうした問題をあらかじめやってみて、置いてみて、先ほどの尾高先生に聴いていただいて、もうちょっとピアノは前のほうがいいかなとか、奥のほう

がいいかなとかを決めて、そこが置き位置ですよみたいなどころを決めました。いざ貸し館入ってきて、僕らも、すみません、ピアノどこに置いたらいいですかみたいな感じになると、ちょっと小屋として恥ずかしいかなと思ったので、一応ここが僕らとしてはいいところだと思っていますけれどもいかがでしょうか、というような感じでアナウンスしてみようか。そんな感じでいきたかったの。

ポップス系に関しては、当然ながら地元札幌ではポップスの貸し館が非常に多くなっています。その中で、僕らがこの劇場でポップスをやる場合に、どういうことをやらなきゃいけないのか。それと呼び込み側の方が、主に音響なんですけれども、この音響はどういうふうに仕込んでもらうのか。例えば4階までこの客席の角度だと届かない。では、じゃ4階席はどうするのかとかいうことをあらかじめ潰しておきたかったの、地元で活躍されている桜庭さんという方をお願いをして本当にミニミニのコンサートをやっていただきました。客入れから始まって、実は3曲しかやっていただけなかったんですけれども、諸々の関係で。その3曲で僕らがシュミュレーションしたということもやってみました。

それとあと、バレエ、ダンス、特に札幌はダンスも結構盛んです。なので、ダンスをやっていたいて、これはリハなんですけれども、リノを敷いて、例えば柔らかいとか固いとか、ちょっと響きがどうだとか、見にくいとか、何かそういうことも含めていろいろとトレーニングを重ねていきました。

あと、これはトレーニングの最後なんですけれども、避難訓練ですね。

一番最初は、消防署を交えて座学的なというか、僕らが作った避難訓練のマニュアルに従って、いわゆるこれでいかがでしょう、これでどうでしょうという感じのキャッチボールで。実際にはコンサートつきで約1,500人程度入っていただいて、最近ではよくあると思うんですけれども、避難訓練コンサートとか、避難体験コンサートとかという形で、2曲目とか3曲目が終わったところに地震が起きました、1回ちょっと待っていてください。誘導します、逃げてくださいと言って、1,500人か何百人かが避難されるというのを僕らがシュミュレーションをしたいですということで、避難訓練を行ってみました。

そういうことがトレーニングと称して大きく3つ行ったところです。

閑話休題じゃないですけれども、これは実は公文協さんの仕事で稚内に行ったときですね。札幌から出ているのが、実はこういう飛行機で双発なんです。プロペラですごい小さくて、何かジェット機のような格好いいやつで、飛ぶとほとんど上がっていくが、水平飛行はほとんどなく、近いので、もうすぐに下りなんですけれども、物すごく楽しくて興奮したので、ちょっと思わず写真を撮ってしまったというやつをちょっとお見せしました。

劇場編として、新国から札幌に行って幾つか反映できたこと、できなかったこと、僕が新国をやってこだわったこと、それで札幌でこれはできなかったの、これはしようがないよと割り切ったことみたいなことを少し持ってきました。

建物についてなんですけれども、先ほどのビデオの中で、音響反射板があります。僕は実は音響反射板があるところというのは乗り込みで行ったケースしかありません。今まで新国には音響反射板がなかったので、ストレートに悪い表現で言うと、音響反射板って邪魔なんですよね。僕らが吊りたいところに必ずバーンとあって、「あそこの下から吊っていいですか」「だめ」みたいな感じのところが大体音響反射板の非常にすごいところ。外すに外せなくて、吊り替えるに吊り替えれないというようなもので、それと僕らが共存共栄しなきゃいけないということで、今回設計の方にもかなり無理を承知でお願いしたんですけれども、一番後ろに先ほど見ていただいたように全てが格納されています。天井反射板、それと正板、それと側板が全て一体型になって、後ろに飛んでいますので、その前までまだ11間ほどありますので、アクティグエリアの上のところには反響板がない状態で過ごせます。

ただ、メリットばかりではなくデメリットも若干あるんです。その反射板を要は後ろに飛ばすために、背丈の長い幕は全部半折りにしなきゃいけません。

また、セット位置に関しては2つ設定させていただきました。通常的位置、通常的位置というのはいわゆる大臣柱に一番近い位置、それとセットバックというのを一つつくっていただいて、実はこれ京都のロームシアターに行ったとき、僕、こういう使い方があるんだと思って勉強させていただいて、それを札幌で反映した形なんですけれども、ロームシアターのセレモニーを見に行ったときだったんですけれども、反響板があるにもかかわらず、緞帳が下りてきて、後ろで転換やってまた飛んで、ああ、なるほどなど、こういう使い方あるのかと思って、あえてセットバック位置ということで、オペラカーテンがおりて、かつ前後のバトンが1本ずつ下りるぐらいの大体大臣から1メートル4、50センチ下がったところに反響板がセッティングできるという位置を作りました。

これによって、実はこの前こんなケースができました。セットバック位置をつくったとことで、この前、消防の楽団の方々が来たときに、オペラカーテンを下ろして、後ろで転換して、また上げてということが反響板の中で可能になりました。これはロームシアターのほうを見せていただいて、取り入れられてよかったのではないかなと思っております。セッティングに関しましては約25分、自重に関しては何と80トンというものです。

オーケストラピット、簡単に数字のほうだけなんですけれども、せりの面積で大体100平米で前後に2分割されています。掘り込みと言いまして主舞台上のところに、主舞台上の下ですね、そこに2メートル65下がったところに約50平米の敷地がありますので、オーケストラピットを普通に

下ろして掘り込みを使うと、150 平米のかなり広々とした空間ができます。これ実は新国と同じサイズにしてもらったんですけれども、それと、ちょっと言葉で書くとわかりにくいんですが、オーケストラピットの上手、下手のこの壁面のところに音響と照明の電源盤をこさえています。1 メーターちょっと下がったところに電源盤がありまして、ピットが下がったときにその電源盤が出てきて使えるような感じで。あとは、当然ながら指揮者用のモニター、連絡設備などは仮設で対応していますということで、これがオーケストラピットです。

こんな形で下げて、客席を前と後ろに分割していきます。これは電動ではなくて手動にしています。電動の善し悪しと手動の善し悪しがあるかなと。僕は舞台機構やっているにはちょっと電動を信じていないようなイメージもあるんですけれども、電動で時々しか使わないものって時々故障しますよね。そのときに非常に困るので、よく使うものはメンテナンスが行き届いているんですけれども、手動でできるものを電動にあえてして、そのときにたまたま故障したというのは、非常に何か悔しいではないですか。なので、これは重いのを承知で手動だったら何とかセーブできるかという形でやっています。決して電動が嫌いなわけではありません。

これは舞台上に上がってのところを撮ってきました。

これは後ほどでも出てくるんですけれども、黄色いロープ、オーケストラピットが下がって、僕らが長時間離れるときには安全をとるために、このロープを張っておきますよというのを持ってきました。後ほどまた出ると思います。

搬入口、今度僕らの劇場は地上 5 階のところにあります。搬入口は地下 1 階にあります。ということで、大きい物と中ぐらいの物と 2 基つくっていただいて、大きいほうは原設計では 8 メーター 50 ぐらいなんですけども、そこをちょっと無理言って、長手方向 9 メーター 50 まで伸ばしてもらいました。

ちなみに 9 メーター 50 というのは大体僕らがいつも使う大型トラックの荷台が 9 メーター 60 なので、荷台に入ってきたものは基本的にエレベーターに入るだろうというところなんです。これは中型のほうなんです、これが大型のほうなんです。トラックに入ってきたものは切らずにここに全て乗りますということをしてみたかったかなと思って、ここを 9 メーター 50 にしました。

実は僕、以前舞監やっていて各地の施設に行ったときに、搬入口状態がすごくばらばらで相当苦労した経験がありました。ある劇場は中 2 階にあるんですけれども、階段がなくて差し上げとか。ある劇場はクランクしていて、真っすぐに入れないので、パネルを切ったとかという思い出もありますし、エレベーターなんですけれども、余り大きくなくて、やはりパネルを切ったとかいう経験もあったので、なるべく上に行く動線だけは確保したいと思って大きくしました。

これは地下 1 階のエレベーター付近の写真です。これはトラックヤードのほうの写真で、大型ト

トラックが2台、横も当然空きますし、プラットホームの高さが1メートルになっていますので、大体大型トラックの荷台とほぼ同じ高さになっています。ここの搬入口を作りました。

ちょっと変わりました、舞台床なんです。黒色で塗ってあります。それと釘、スクリューですね、ビス。穴あけても別にオーケーかなと思っています。

舞台框の考え方として、舞台框という考え方をなくして、釘が一番前から打てるように框をなくしました。僕の中では舞台床は消耗品というふうに思っていて、当然ながら釘打ってオーケー。釘でも倒れるような、今、大型のパネルがあります。それを留めるには例えばビス打たなきゃいけない。もしくはそれを固定するには、本当にもう穴をあけてホルトアップしなきゃいけない。それが、僕は小屋側のほうが、それはしようがないよね、必要だよ、安全だよそのほうがというふうに割り切れるならば穴あけてもいいかなと。ただ、条件としてはその穴がもとに戻ればいいかなと。そういうふうには、僕は舞台の床のことは思っていないんですけれども、そうでもしない限りは、今かなり大型の大道具が出てきていますので、釘だけでは絶対留まらないのはもう承知の上、ビス打っても留まらないかもしれません。ただ、ツアーのときはほぼビスでいけるとは思いますけれども、そういうふうに思っています。

舞台框も建築家のほうはきれいな框がまず5寸ぐらいあってという発想が消えなかったんですが、そうすると僕らとしては仕事できないし、オーケストラピットを上げて使ったときにはそこだけ非常にいびつな形になるということがあるので、框という考え方は捨ててください。その代わりに僕らとして釘が打てるように、そこは作っていきたいということでオーダーしました。

ケーブルピットというのも作りました。舞台備品に関して、後々また違う観点で出てきますけど、幕類に関してはひだなしの袖文字、オペラカーテンがあって、リアスクリーンがあってということなんですけれども、あえてここでひだなしの袖文字と書いたのは、札幌、僕行ったときにはまだやはり別珍で倍ひだという、いわゆるそういう形式の袖文字が多かったです。

地元の有識者の方に集まっていたいて、ほぼ月1回検討委員会的なことをやっていたんですけども、まずこれも言われました、床が黒い。それはあり得ないだろう。袖文字ひだがない、それはあり得ないだろうということででしたが、やはり今僕らが使っている形でいくと、ウールサージ入れられるんだったら、ひだなしでしわにもならないですし、最初から防炎加工にもなっているんで、こっちのほうがいいんですよとか、あとは、最初原設計では緞帳がありました。ただ、緞帳やめました。理由としては額縁が14メートルで間口が20メートルある。ということはさらに1メートルから1メートル50ずつでかいですよ。それが織緞帳であるといかほどするかということ、どれだけ登場するかということを見ると、これはもうあえて切ってくださいと。その代わりにその浮いた予算で別なことに使いませんかということで、札幌市にお願いして、受け入れていただきました。

リアスクリーンに関しては白と黒、2枚入れました。平台とスチールデッキも入れて、これも全て色を黒にしています。黒い床に置いてもうそのまま手入らずの状態で使いたかったので、天板を含めて側面を含めて全て黒で統一しました。これは備品のリノ巻きというのがあるんで、ぐりぐりって回すとリノが巻けていくような。箱馬とか、平台あるんですけど、黒で塗ってあります。

また、少し話は変わりましたが、今度は運営する体制としてこう考えたということを経験してきました。

まずは、僕は東京からある人数を連れて行くのではなくて、地元札幌で基本的に運営できるようにどうにかできないかということで、共同体を作れないかということでお願いをしまして、札幌の7社に集まっていただいて北海道ステージアート・アライアンスという頭文字をとってH S Aという会社を作っていただいて、今の劇場運営の委託をお願いしています。

新国立劇場のときにはT C Sという会社を作っていただいて、それは東京の大道具の大きい3つの会社だったんですけども、そこで作っていただいて、同じように委託の会社を構成していただきました。

1社でやるのと数社でやるのと何が違うかということ、これはメリットがあると思っています。1社でやると、その劇場の色は必ずその1社にしかならず、そこでやったことの情報というのはその1社以上には出ていかないとずっと思っています。複数社集まると、そこでまず協議が始まります。この仕組みはどういうふうにしなきゃいかんとか、もっと身近なところでどういう安全措置をとらなきゃいけないかというのを、その複数社で話すようになりますんで、それが一番大きいかんと思っています。その中でどう活用できるかどうか、それが僕らが中心にならずとも、この委託会社ができたことによって自然とできるのかなというふうに思って、札幌でもH S Aをつくっていただいて、今運用しているところです。

舞台技術部に、要は劇場に舞台監督を僕は置きたいと常々思って、座組みをして、地元のばりばりやっているある舞台監督を劇場に迎え入れることが可能になりました。彼が入ったことで、特に自主公演のバレエ、オペラ等々に関して、彼が劇場付きの舞台監督として創造型劇場というのを支えてくれていると、今、僕も思っております。劇場を使うというのは管理ではなくて、やはり舞台監督を中心とした作る方、作れる方、運用できる方、こういう方のほうが僕は得意だと思っていますので、当然管理は必要ですけども、舞台監督が必要かなと思っています。

これは工房なんですね。先ほど劇場の中で工房って文字が書いてあったんですね。工房を作っていただきました。札幌市のほうにお願いして、ある空間をちょっと仕様、目的を変えていただいて作っています。

右側に見えるのがパネルソーですね、左側に電動工具が見えたりとか、劇場の中でこういう物を

使える方がいれば、単管切ったりとか、ちょっとパネルを作ったりとか、ちょっと何々作ったりということが可能になるかなと、こういう空間があることで、大分遊びができるというか、ゆとりができるというか、創造型の劇場になれるかなと思っています。

左の端のほうに見えている赤い物なんですけど、これは実は今日から初日を迎える劇団があるんですけれども、その装置をここの工房で作って下で使っています。という一例です。そんな感じで今運用を始めています。

できなかったことはいっぱいあるんですが、あえて2つぐらいしか持ってこなかったんですけれども、前舞台あたりのおさめ方とか、これちょっとできなかったの、これまた別な時間で草加さん等々に考えていただいて、うまいおさめ方が多分あるのではないかなと思っています。

それとあと、一番のネックとしては技術部の中で映像部門というのが作れませんでした。これは相当説得したんですけれどもやはりだめで、やっぱり今の時代、舞台、照明、音響だけでは何か欠けていますよね。映像ですよ。

僕らが例えばお客さんでパワーポイント出したいんだけどというぐらいだったら、ぶすっと差し出てるかもしれないんですけれども、もう少し凝った形で、ここからこういうふうにするとういうふうになるんだとかという細かい話とか、スイッチャーがどうのとかいったら、すみません、ちょっと映像の専門の方に聞いてくださいと言いたいですけれども、そこの方がまだ劇場に雇い込めていないというか、枠がとれていないというのが非常にだめかなと。

多分ほかの施設でもそうだと思うんですけれども、このプロジェクター一体誰が管理するのという、音響なのか、照明なのか、舞台なのか、映像さんがいない。多分今映像部があるのは新国立劇場ぐらいじゃないかなと思っています。非常に大事な部門ですけれどもできなかったなど、非常に残念です。

こだわったこと。ほかの劇場との比較は随分しました。僕東京にいるときから、いわゆる公共劇場舞台技術者連絡会という集まりで、全国の20館ほどとかなり密接な情報を交換したりとか、いろいろ見せていただいたとかということで、比較はしてきたつもりなんですけれども、実際に札幌行って、ここ札幌は一体どこに位置するのかとか、どこを目指していくのかとか、どの公演、何をしていくのかというのは、もう一回きちんと考えないと無駄なものを作るんじゃないかなと思って、まず自分の劇場はよその劇場と比較してどこの位置にいくんだろうか。トップじゃないですよ。どこを目指すんですか。創造型10割じゃないですよ。何の公演するんですか。オペラばかり10本じゃないですよということを見据えないとすごく範囲を狭めた施設をつくりがちかなと思ったので、ここはかなり考えたところでした。

それとあと、ここで必要なかというのはいつも僕は手帳に書きながら自問自答していたんです

けども、新国にあったものとか、ほかの劇場であるもの、でも、新しい劇場には必要ないかもしれないし、もしくは持たなくてもいいもの、持ったほうがいいものがあるかもしれない。

ちょっと表現がわかりにくいかもしれないですけども、おもちゃがないと遊べないですよというところを一つキーワードで、僕らが本当にこの備品要るのか、このシステム要るのかというものあるんですけども、ただ、この先5年・10年・15年をここ札幌でやることを考える場合に、今遊べるおもちゃがないと先に行けないですよということで、札幌に作ってもらったものが幾つかあります。

それと備品に関しても、スチールデッキとか先ほどのリアスクリーンも白と黒を買ってみました。これもまだ持っているところが少ないかもしれませんが、あればあったでいろんなケースが生まれるのかなと。そのいろんなケースを物が無いからできないというのは非常にやっぱり新しい施設としてはどうなんだろうというのを自問自答しながらやってみました。

舞台機構では、高性能な電動バトンとか無線でできる操作卓、こういうのは本当に必要なんだろうかという論議も結構あるんですけども、僕は例えば無線の操作卓、賛否両論あると思うんですけども、いわゆる小屋の管理の人数が物すごく少ないときに、例えば僕だけでこの10本を今日動かして操作しなきゃいけない時に、一番確実なのは目視できるところにいて、運転できるのが一番安全かもしれません。その代償としては操作卓が無線になっていることが条件かもしれません。ただ、無線の裏返しはその無線が途切れたらとか、誤操作、誤動作したらとかというのがありますけれども、これはどっちが重要かというのは改めて考えてもいいかなというふうに思います。

照明、ここであえて書いたのは、デジタル卓を入れました。一番最初の設計では120チャンネルの3段プリセット卓といういわゆる卓が入っていたんですけども、やはり今あれだけの劇場でムービングを持たないわけにはいかないのかなと。ムービングを持ったときに、例えば120チャンネルの3段プリセットは一体何ができるのかと考えると、結局ムービング卓は必要になってくる。ということであれば、デジタル卓を最初から入れておいたほうがいいのではないかな。

そういうこともあり、ここで何が重要かというのは、いつもいつも僕の中で何か反すうじゃないですけども、本当にあったほうがいいのかというのを自分で自分に聞きながら出して、まだ解答が出ていないものも自分の中で幾つもあります。

例えばスペックを上げるだけがいい小屋の条件ではないというふうに僕は思っています。ある程度下げて使いやすい、またこれ以上は使わないよね。そこを切ると何が生まれるかというコストが生まれますよね。例えばある程度スペックを上げれば、ハイスペックになるので、そのためのウインチはコストが当然ながら上がっていきますけれども。それで、上げた分得るものがあればいいんですけども、そこまでのスペックが必要でないというふうに読むんだらば、ある程度の

ところに下げて、逆にコストをカットして、その予算で備品を買うとか、違うものを入れるというのが必要なのではないかと。これはいつも必要なんでしょうか、要らないんでしょうか。これ札幌のために入れるのか、もしくは北海道全体のために入れるのかというのも考えて入れると、僕の中では良かったのかなと思っています。

これは技術卓というのを写真撮ってきました。新国立劇場のときでも同じような物を作ったんですけども、それを少し発展型みたいな感じでキャスターをはかせて、移動できるタイプにしてあります。ここに舞台監督が座って、キューのコールをしたり、呼び出しをしたり、ブザーを鳴らしたりとかができるようにです。

これは始業前ミーティング、館側は舞台のチーフが誰、照明のチーフが誰、音響が誰々で、先方さんは舞台監督さんが誰々という感じで名前を書いてやっていくと。左側の余白のほうにはリハーサルは何時から、開場何時から、開演何時からみたいな感じでちょっと書いていく。それぐらいのことをちょっとやっていただくホワイトボードなんですけれども。

これはたばこを吸うところです。大体昨今の施設ではたばこ吸えるところは非常に少ないんですけども、まだ法律で禁止されていないのであれば、やはり建物の中に正々堂々とたばこを吸えるところがあったほうがいいのではないかなと思ひ、これは作っていただきました。

これはフォークリフトの写真をちょっと持ってきたんですけども、要はこういうかご、これは建築用で売っていますので、割と安く買えるんですけども、これは立体収納庫的にしまえるように、先ほどのフォークリフトで持ち上げて、ここの中に押し込んでいくと、向こう側にこの棚がまだ3段ありまして、下だけで今4列で、奥に3列ありますので、いろいろ収納ができますという一例です。

これは客席イスの背が倒れるところですね。この列に関しては音響とか照明の持ち込み卓がよく来るであろうというところに背倒れ席を作って、卓を組みやすくしましょうという、その一例の写真です。

積丹半島です。積丹ブルーというとてもとてもきれいな海で、沖縄で見た以上にきれいだなと思って持ってきました。積丹半島です。ぜひいらっしゃってください。

地域として東京と札幌、先ほどは劇場として新国立劇場と札幌文化芸術劇場だったんですけども、地域としては、じゃ、どうなのかと。

まず、情報という観点だけでいくと、商品とか製品の情報がもうなかなか入りにくい、これはもう正直なところなんです。例えばスモークマシーン新しく出ました、もしくはこういうものが今出ていますというのが、新国のときだと自然と入ってくるんです。間接的だったり直接的だったり。新宿あたりのどこかのオープンスペースに行くとそれが見える。もしくはショールームに行くと見える

というのが、もうほぼ当たり前のように感じたんですけども、今回はもうかなり情報をとるのが苦労した感じです。そういう情報の面ではかなり入りにくい。なので、どうすると入ってくるかというルートを作っておくのが一番大切かなと改めて思いました。技術的なことなんですけれども、先ほどの技術卓、インカムを使ってのコールとか、舞台機構の使い方というのは、やはりなかなか地域、地元でなじんでいない場合があると思います。例えば、今までの劇場は全部肉声でやっている。「バトンの13番ダウンスタンバイ」で、「おい、おろせ」みたいな感じで肉声でやっている。このほうが安全かもしれません。早いかもしれません。けど、今度新しい劇場ではインカムをつけてインカムで操作盤とやりとりをしてやっていきます。技術卓を使って、インカムを使って、舞台機構を使って、それをどういうふうにコールしていくのか。13番ダウンスタンバイ、向こうからダウンスタンバイオーケー、ダウン、というような言葉を決めていくというのも、本当に一からです。そういうのも含めてまだまだ情報というのは入ってきにくいのではないかなというのは改めて感じました。

これは機構の操作卓の写真を持ってきました。これはバトンです。上部がφ60mm、下部がφ48.6mm、ラダー型のバトンになっています。

安全についてはルールということで、先ほどもちょっと出ましたけれども、始業前ミーティングは必ずやっています。例えば9時から仕事がスタートすると9時ちょっと前、5分前でもいいですし、10分前でもいいんですけども、そこから舞台のチーフの誰々です、先方乗り組みさん紹介お願いします、舞台監督の誰々です。そのぐらいのやりとりで、あとはそれぞれの打ち合わせで、そこから仕事をするようにしています。

ヘルメットとか作業時の服装であるとかというのは、どうなのかなということで問題提起も含めて幾つか持ってきました。これは先ほど僕の始業前ミーティングで使っているときのホワイトボード、これは舞台係、操作係が使っているヘルメットをあえて写真を持ってきました。舞台係だけ実は赤くしています。ほかのセクションは白で色を変えています。なぜかと言うと、実はヘルメットを着帽にしたときに何色をかぶっているかというのはかなり分かりやすいんです、赤だと。打ち合わせのときに舞台機構のほうは赤メットかぶっていますんで、バトンの上げおろしのときは赤メットに言ってくださいというだけでわかります。赤に言えばバトンが下りるのかという感じでわかるので、唯一赤にしています。

これは今話題のハーネスです。安全帯を今後僕らとしてもどうするのか、実は僕の劇場ではこういうふうにしていうのはまだ決め切れていません。やはりいろいろ情報をいただきながら進めていくしかないかなとは思っています。ハーネスの講習、それも多分やや手遅れになるかなと思いますけれども、今後ハーネスに切りかえなきゃいけないので、そういう問題もちょっとあるかなと

思って写真を撮ってきました。一応持っていますというのは、まだ僕らのレベルです。安全の確保するためにはコーンとパイロンみたいな、そういう物も例えば持っていますと。これは先ほどの写真ですけれども、安全ロープです。

これは痛感させられたことです。ツアーで来ることということはどういうことなのかと。要は札幌のある劇場だけがスペックが良くて仕込みやすくて、ツアーで来る方々というのは、ほかの10カ所、15カ所、20カ所でやっていることをなるべく同じでやりたいですよ。ここは今後新しい施設を検討される時の一つの要課題かと思います。

例えば札幌だけ舞台機構のバトンがすばらしいスペックでありますよと言ったところで、ツアーで来ると、そのトラスをやっぱり上から吊りたいんですよ、すのこから吊りたいと。それはやっぱりツアーで来ることというのは同じことをなるべくしていきたいということなので、低いスペックに合わせてくれと言うんではないんですけれども、ハイスペックを求めるのであれば、ほかのところでできることも、こういうふうだったらできますよといったことを見据えて設計していかないと、逆にあそこの小屋だけはできないんだということになりかねないかなというのがちょっとありまして、他の場所との整合性もとる必要があるかなというのを新しい劇場に行ってみて痛感をしたところです。

最後の写真になります。札幌競馬場で、楽しいこともいっぱいありますのでということで、札幌競馬場の写真を持ってきました。

あとはすみません、一、二分だけいただいて、札幌で目指すことということで、題目だけになると思いますけれども、人材育成をやっていききたいかなと。

なぜならば、東京では僕なんかもそうでしたけれども、フリーで食べている人というのは結構いますよね。フリーで舞台、フリーで音響、フリーで照明、フリーでやっている人はいっぱいいますけれども、札幌ではフリーで食べている人は非常に少ないということなんです。フリーの人がいないと、やはり仕事がうまく回っていかないんじゃないかなというふうに僕は思っています。地元の芸術団体との連携もやっていきたいと。技術の導入というのは先ほどちょっと申し上げたとおりなんで、もう少し頑張っていければいいかなと思います。

最大の命題としては、創造型の劇場ってよくこういう会議で出るんですけども、一体じゃあ創造型の劇場って何ですかと言われたときに、うまく説明できるかというのはあるかなと思います。

1枚の写真をちょっと持ってきたんですけども、これバックステージツアーをこの前やりました。真ん中でピアノのプロの方が弾いているところの、その弾いているところに上がって、弾いている様子を舞台から見るもよし、聴くもよしということでやったんですけども、非常に簡単で低レベルかもしれません。だけど、僕はこういうことも創造型の一つとして訴えていってもいいのかな

と。

あえて言いたいのは、オペラ作る、バレエ作るだけではなく、こういう何か小さいことも含めて作っていているんですよ。これがソフト。人も作っていているんですよ。これも創造型。なので、人もものも作れるという形で目指していければいいのかなと思っています。

草加さん、すみません、ちょっと大分時間を食べちゃいまして、申しわけございません。

○草加氏 短い時間でたくさんの情報をお話しいただきありがとうございました。

今聞いていただきましたように、一つの劇場が開くのいろいろなドラマがあってここまで来ている。ましてや去年の9月の地震という、開館前のカウンターパンチを乗り越えられてきている。実は地震が起こった日の朝、私は札幌の劇場に伺う予定だったんです。私は神戸にいて、神戸から飛行機で札幌に移動しようと朝起きたら、航空会社からのメールで、飛行機が飛ばないことを知って、伊藤さんに電話をしてら、何が起きているのかわからないというところから始まったのを今思い出しました。情報がないのだと思って、テレビ放送を携帯で撮って、そのまま巨大なメールを送ったのを思い出しました。

話を戻しますと、伊藤さんが説明していただいた中に、新国立劇場という日本でも最上位に位置する組織を備えて、最も芸術性の高い事業を展開しているところと比較すると、決してこの札幌は引けをとらないハード条件を備えていると思いますが、それでもまた違う地域のロジックの中で、これから伊藤さんは地域の劇場を創ろうとされている。少なくともハードについては、相当高いレベルのものを手に入れたという段階だろうと思いますが、そのハードを動かすための人材、陣容についても後で紹介していただければと考えていますが、決して10人や20人で動くようなハードではないんですね。ましてや今、創造とは何かという話をされました。そこで作品を創っていくとなると、さらに屈強な組織が必要になってくると思います。今、やっと劇場が動き出したところなので、実際の試練はこれからかなというように思ったところです。

今申し上げたように、ただ施設を紹介するだけではなくて、その中をどう劇場化していくのかというお話をしていただいたように思います。組織の話は、これから少し話をさせていただこうと思いますけれども、その後で参加者の皆さんからも質疑をしていただければと考えています。

ではまず、伊藤さんに組織の話をしていただきましょうか。

○伊藤氏 組織なんですけれども、今19名という枠をいただいて、その中で動いています。19名。

○草加氏 舞台技術スタッフですね。

○伊藤氏 はい、そうです。舞台技術、多いかどうかはまあ置いておいて、19名と枠をいただいています。一番最初行ったときには8名か9名かなというぐらいの枠だったんですけども、それをいろいろ説得して、説明して、ごねて、暴れてみたいな感じで19名。

職員と委託の内訳に関しては職員が4、委託が15、これおかしいと思いますよね。これ自分でその数字を作りました。なぜかと言うと、先ほどのHSAという会社で運営していくためには、職員が多いと委託の数がすごく減ってしまいます。職員は異動します。それを避けるためには委託のほうを多く、職員を少なく、これが僕の中の一つの持論でもあります。

○草加氏 そのほかの方を含めて全陣容としては何人ぐらいいらっしゃいますか。

○伊藤氏 財団職員としては、今50をちょっと切るぐらいなんです。事業をやっているところ、管理課という名称で劇場のスケジュール、受付、それと諸々のことをすごくやっています。ここは非常にハードになっています。

それと、先々の公演、自主公演というのを計画する事業課というのがあって、そこでコンサートであったり、例えば演劇系であったりとか、オペラ系であったりとかというのを進めていくポジション、それが全部含めて大体50をちょっと切るぐらいですね。

○草加氏 先進施設でいうと、新潟のリュートピアとか彩の国さいたま芸術劇場クラスの陣容になろうと思います。その上の陣容になってくると、世田谷パブリックシアターだとか北九州芸術劇場、70人規模というのが、国立劇場を除けば日本で一番職員数を抱えている劇場になります。ですので、50というのは多いようですが劇場の使命を果たすためには決して多すぎる数ではないように考えます。ただし、今日ご参加いただいている劇場から考えると、もう雲泥の差の陣容を抱えている劇場だとお感じになっている方が少なからずいらっしゃると思います。

技術部で委託も含めてということですが、19名を抱えること以上に19名で稼働させていくことの方が大変なことのようには思います。もちろん、今ご紹介をいただいた劇場のハードを稼働させていこうとしたときに、確かに5人や6人で回るものではないことはご理解いただくと考えます。搬入は地下階、舞台は5階、それからクリエイティブスタジオもあると考えていくと19名、伊藤さんがおっしゃったように映像の人間が欲しかったというのもわからないでもないですけども、なかなかそこまで届いていないというのが現状かもしれません。

では、参加者の皆さんから、質問をしていただく、あるいは自分たちの劇場と比べてどう違うのかということをお願いできればと思います。挙手をしてお名前と所属先をおっしゃっていただければと思います。

○質問者1 今日はありがとうございます。私、O施設のAと申します。

先ほどのお話の中で、舞台の技術スタッフが19名、そのうち職員が4名で委託が15名ということなんですけれども、その委託の15名の方というのは固定のメンバーなんでしょうか。

○伊藤氏 基本的には固定です。基本的にはと言ったのは、やはり札幌という地域を考えると、全部固定というわけにはなかなかいかないかなと。もう少し言うと、例えば7社で構成していただいている、

きょうは例えば会社Aのところの照明さんが非常に忙しい日で、照明さん、そっちにちょっと持っていきたいんだよなというオーダーもありますよね。そのときにはある程度柔らかいシフトを組まなきゃいけないので、じゃ、どうぞと。その代わりに、B社の方から例えば照明さん2人入ってくださいとかいうケースもあるということで、ある程度は固定ですということです。

○質問者1 ありがとうございます。

○草加氏 ちょっと補足をすると、7社でコンソシアムを組んでいるというやり方ですね。地域にある舞台技術会社さんに共同の組織を作っていただいて、そこから15名を出してもらっているという形です。

これは、さっきお話があった新国立劇場のTSCとかというのも同じで、平等に仕事を出すということと、それからクオリティーの高い人を集めるという1つの方法として幾つかの劇場でやられている。特定の1社に絞るのではなくて、共同で人を出してくださいというやり方をされているということですね。

ほかに。どうでしょうか。余り札幌文化芸術劇場で学ぶことはなかったでしょうか。

○質問者2 T施設のBと申します。お世話になります。

今、委託の会社を地元の7社の合同会社ということにしているとのことですが、これですと随意契約でいけるんですか。

○伊藤氏 僕のところは随契で頑張っていました。僕は新国にいるときには、ほかの契約方法、例えばプロポーザルであるとか、評価型であるとか、あとは単に一般入札というか、価格競争みたいな感じで、あったんですけども、今回に関しては、まず第1回目なので随意契約でということをお願いしてやっています。

理由としては、まず、これは僕全部調べたわけじゃないんで、こんなこと言うちょっと怒られちゃうんですけども、なかなか札幌、北海道でいわゆるプロポーザルで仕事をとっていくというケースが多くないんじゃないかなと。ということでいくと何が起こるかという、書類の書き方の訴えどころが非常に弱いんだと思うんです。

僕はほかの会館さんでその委員もやらせてもらったことがあるんですけども、慣れているところというのはいまです。色の使い方、表現のここがポイントなんていうのがすごくやっぱりうまいんです。それを向こう3年間の技術と引き替えになると、これは絶対書類の書き方がうまいほうに流れてしまうなということで、第1回目だけはとにかく地元でお願いしたいと。しかも、地元でとれないと、どんどんどんどん空洞化していきますよねということを言いつつ、いろいろ頑張っていて、初回は随契でということやらせてもらいました。

○草加氏 ありがとうございます。きっと、随意契約でやられているので、今後、随意契約の期間がどれ

ぐらいかわからないですけども、最終的には事業評価みたいなことをしっかりやっていくということが一つのエビデンスになっていく、次に業務を続けていく上ですね。ですから、それをうまくやれば、随意契約というやりの方がハードルが高いかもしれないので、考え方としてそういう方法もあるということです。

新国立劇場や世田谷パブリックシアターもそうだったと思いますけれども、プロポーザル方式ということで一般競争入札で業者さんを選ぶということを今やらなくなりつつあります。特に東京ではたくさんの事業者さんがいらっしゃるの、そんな中で協力事業者さんを選ぶにはプロポーザル方式として幾つかのテーマを与えて提案をしていただく。もちろん、予定価格というのも評価の対象ではありますけれども、そんな方法で業務委託先を決めるという劇場が増えているということです。皆さんの劇場でもそういうことをやられているところは多いんじゃないかなと思います。

どうでしょうか、

では、私がお場にいらっしゃる方に聞いてみたいんですけども、伊藤さんが言われたように、私が知る限りは映像担当を技術の担当として劇場に置いているのは新国立劇場ぐらいしかないんじゃないかと思っていますが、皆さんの劇場で映像の担当者を置いているところはありますか。

お、あるんですね。ちょっとお話を伺えますか。施設名と、それから何人いらっしゃるかということと、その方を雇用しているのかどうかということを紹介していただけませんか。

○受講生 1 Y施設と申します。映像担当2名おまして、2人とも正規のセンター専属の職員になります。

○草加氏 もともとそういう機能が高い施設でしたね。最初から映像の方がいらっしゃるんですね。オープンのときからいらっしゃるんですか。

○受講生 1 オープン直後は多分いなかったと思うんですけど、その年の途中から採用をしているはずですよ。

○草加氏 なるほど、わかりました。僕も1度仕事させていただいたことがあるんですけども。

ほかに何か聞きたいことがありますでしょうか。なぜ2,300席かって聞いていいですかね。

○伊藤氏 2,300席の理由は、もう非常に単純なところからきているんです。今まで、新しい劇場の前に厚生年金会館というのがありまして、そのキャパが2,300席だったんですね。もう既になんていっていいんですけども、ネーミングライツでニトリ文化会館、その厚生年金会館のキャパが2,300席ということで、要は地元のいわゆるプロモーターの方々が最低そのキャパがないと商売にならないというそのベースがあるので、劇場のしつらえとか中身は別としてキャパは2,300があるべしということです。

なので、札幌市の思いと建築家の思いとプロモーターの思いというのは多分全然違うと思うんですよ。プロモーターとかだと2,500席、新しくつくっていかれるんだったら2,500まで欲しいと。オペラとかクラシック関係の方は例えば1,800とか2,000席をちょっと下回るぐらいのキャパで十分なんだとか、その辺の論議は随分されたみたいなんですけど、最終的にはその前にあった会館

のキャパシティーを受け継ぐということで2,300席と、そういう形で今おさめています。

○草加氏 もし、手が挙がらないようであれば私が質問をしていいですか。

奥舞台を持つ、ひょっとすると最後の劇場になるかもしれない、この中でも奥舞台をお持ちの劇場という、いわゆる業界用語ですかね、多面舞台というふうに呼ぶことがあるんですけども、新国、愛知、富山、びわ湖、兵庫、埼玉、札幌ということになりますか。

○伊藤氏 浜松もあります。

○草加氏 そうですね。というように幾つかの施設ができてきましたけど、さすがに副舞台として側舞台だけじゃなくて奥舞台を持つ劇場というのは、まあ、大きな劇場なのでなかなか造られない。

ただし、伊藤さんは新国立劇場以来、多面舞台という劇場でお仕事をされてきた。私もちょっとほかの劇場なんかでもお手伝いしたことがあるんですけども、副舞台を持つことのメリットみたいなことを少し教えていただけませんか。

○伊藤氏 まず、先ほどの映像関係でいくと、後ろからの投影でまず一番有効なのは奥舞台だと思います。

奥から映すことで、広大なスクリーンが映像に出ますよというのは、これはもう説明することもないかなと思うんですけども、そのためにはもう相当引きしろを引いた形の奥に空間がないとプロジェクターが仕込めないと。そのためにまず有効かなと思っています。

そのときに、今度もう一個問題になるのが、実は奥舞台のギャラリーの高さなんですよね。新国を作るときは実は二十二、三年以上前なので、奥舞台のすのこの高さが11mと聞いたときはもう十分高いと思いました。11mの高さなんてもう何でもできる、十分高いと思ったんですが、辞める数年前ぐらいから奥舞台ギャラリーに映像がかかるんですよね。後ろから出して行って、11mのギャラリーがあるので、11mのところ影が出ると。

なので、文字の高さは必然的にそれよりも下げなければいけない、何人かの演出家に、「お前な、ちょっとあのギャラリーもうちょっと何とか切れないのか」、まあ冗談ですけども、切れないのかと言われて、残念ながら結構固いんだよねみたいな話をしたことがあったんです。

その関係があって、札幌に行ったときには、実は一番最初こんなことをお願いしました。当然ながら新国を見た平面と断面だったので、高さが11mだったんです。これは僕もう既に数年前から低いというふうに使われているので、あと1m50cm、もしくは1mで構わないんで上げてくれと。そのためにすのこを切ってもらって、ギャラリーの床をカットしても、僕はいいと思いますということで、実は先ほどちょっと申し上げなかったんですけども、ギャラリーの一番下のところを切っちゃいました。それで、一番低いところを12.5mにして、プロジェクションマッピングとかリアスクリーンとか、そういういわゆる後ろから打つための最低条件としてのハード側のスペックを上げた。それが一番やっぱり大きかったかなと思います。やはりリア打ちの影がどうしようもないというの

をギャラリーが上がっている分だけで解決できるんだったら、それは僕らのほうの1手先行ったという事をうたって行きました。

それと、先ほどあった多面舞台ですけれども、こんな感じで答えています。

多面舞台の有用性としては2つあります。例えば仕込みやばらしのときに安全にそこに荷物を擱いて格納したり仕込みをしたりということで、並行して仕事をすることができます。ということで、安全かつ早くすることができますというのが1番です。

2番は、例えば本格的なオペラとか、あとは大型のミュージカル、例えば帝国劇場でやっている大型のミュージカルを招聘することができます。要は袖とか奥とかにないと、そちらの劇場でやっている転換、物が100%入らないでカットバージョンになっちゃいますよということで、その2つをきれいに整理整頓して、いつも説明をするようにはしていたんです。そんなふうにならなくて多面舞台、奥舞台は考えていました。

○草加氏 それから、この劇場の持っているインフラとしての特徴は大道具庫を持つことのように感じています。巨大な大道具庫を舞台の下に持っています。コンプレックス施設なので搬入用のエレベーター、きっとこれも日本で一番大きい搬入用エレベーターだと思います。ちょっとその辺のことを紹介してもらっていいですかね。

○伊藤氏 まず、わかりやすいほうで、搬入用のエレベーターなんですけど、先ほど本編の中でも、かなり早口でちょっと説明したんですけど、もう一回言うと、僕はフリーでずっと日本全国回らせてもらいました。いろんな経験させていただいて、やはり一番きついのは搬入口条件なんです。さっきも言ったんですけど、中2階の上にあたりとか、真つすぐ入れないとか、大きいものが入れないエレベーター持つ施設というのは実は結構あって、毎回毎回道具を切ったりとか、つないだりとかカットせざるを得なかったりとか、結構そういう苦い思い出があったので、まず搬入口だけはというふうに思っています。

実は新国立劇場はかなり優遇された施設で、1階に堂々と搬入口があって、組み立て場があって、荷捌きができる場所があって、そのさらに奥に劇場があると。さすがにそこまでは求めないんですけども、エレベーターの大きさにはまずこだわりました。

最初の原設計では8m50cmぐらいであったんですけども、絶対9mから9m50cmまではないと物を入れられないということが出てきますよと。特にこれだけ大きな劇場で大型の何々をできるという施設をうたっている割に、入り口が脆弱であると非常に困りますよということを札幌市さんにずっと伝えて、じゃ、入らないものって一体何なんだみたいなね。

そういうのを新国の道具を例に持ってきて、こういうのだと10mあるよみたいなね。いや、そんなでかいのあるのみたいな。だから、そんなちょっと無理くりも含めて作って、おかげさまで9

m50cm という大きな物を僕は手に入れることができました。エレベーターが動けば大型トラックで積んできた物に関しては、入らない物はないんだというところまでは自信を持てるかなと。やはり、持ってきたはいいけど、これ入らないの、どうすんだよというふうになるのはやっぱり新しい劇場としてはどうかなというのがちょっとあったので、それが搬入口ですね。

あと、さっき草加さんもちょっと言われていましたけれども、やっぱり地下1階にあることの現実というのはやっぱり僕ら考えないといかんかなと。当然ながら劇場レベルにあるのが一番いいんですけれども、劇場までやっぱりトラックを持っていくというのはちょっとおかしな論理ですよ。狭い袖にトラックごと上げてそこで搬入すればいいじゃないかという方もいたらしいですけれども、大型のエレベーターと荷捌きできるスペース、それはどこかという、プラットホームまでのいわゆる交差というか、距離というか、そこがやはり一番かなと思っています。

先ほど出しましたこのシャッターの向こう側に、先ほどのでかいエレベーターがあります。ここはプラットホームのこっち側なんですけれども、プラットホームまで多少敷地がありますので、ここで例えばばらしのときにはある程度荷さばいて、早目の物から積んでとかということがここでも少しできる。それがやはり一番大型エレベーターにとってはいい空間だなと。やはり人によってはこのプラットホームのすぐこっち側にエレベーターあったらどんだけ楽かと話される方もいるんですけれども、それと今度ばらしのときとか考えると、上で積み順で全く同じに積んでこないと詰めないですよ。それともうちちょっと向こうに敷地があったほうが楽と違いますかということ、随分説得をしたことがありました。

大道具庫に関しては、やはりほかの施設、新国もそうだったんですけども、どうしてもなかなか事務所と倉庫というのは潤沢にとれないんです。なので、僕が新しく行く札幌に関しては、確実に大道具庫、倉庫に関しては、さすが北海道だね、広いねというのを言わせたいかなというのがあって、大道具庫に関しては規模的に広く、全部が全部とは言わないんですけども、背の高いところが一部あって、5メートル、6メートル級の何か物を立てかけられるというのは必須かなと思って、かなり広い空間を作っていただいて、整理整頓していただいたというようなことがありました。

○草加氏 今日配っていただいた冊子の33ページに大道具庫が載っています。それから、搬入口については同じく29ページに図がありますので、参考にさせていただければいいと思います。33ページの大道具庫、かなり大きいですよ。きっと上階の主舞台と同じぐらいの面積があるんですかね。

○伊藤氏 そうですね。面積的には大体それに匹敵するぐらいあるんで、かなりそこで音響、照明含めて舞台のほうの物もある程度はさばけています。

○草加氏 ただし、これを作ることによって、新国立劇場の持っていた床機構という相当の動力を失うことになっているのかもしれないですけども、床設備を持たないという選択をしているんですよ。そ

の辺の経緯についても紹介していただけますか

○伊藤氏 そうですね。これはちょっと機構メーカーの方々がいると、非常に不快な表現になると思いますけれども、僕は創造型に特化して、その劇場で絶対これを作るんだというのが決まっていなときは床機構は要らないと思っています。

そんなお前が何で新国立劇場にいたんだみたいな感じですけども、盆、せり、スライディングステージ、ワゴン、これ僕は普通の劇場であれば要らないというふうに断言していいんじゃないかと思っています。そこに盆があっても、何に使いますかといった感じで、そこに創る方だけいても、それじゃ年にどのぐらい動かすかということになると、イニシャルコストのほうが圧倒的に高く、あとは維持管理のほうの保守点検のほうが非常に大変です。最近使っていないので動きがちょっと怪しいかもしれないけども使いますみたいな感じでは、具合悪いかなど。

迫りにしても、新国立劇場はやっぱり命題はきちっと決まっていました。オペラをやりたいと。オペラの入れ替え公演をやりたいということを考えると、床機構がないとこれはできないので、あれは必要だというふうに僕は今でも断言をできるんですけども、じゃ、それと似たような感じで主舞台にせりがなくてもいいのかと聞かれると、僕はなくてもいいと思いますというふうに答えたいかなと思っています。やはりその迫りで何をやりたいか。確実にそこでやりたいことがあるんだったら別ですけども、歌舞伎座は特化しているので、盆があったり、迫りがあったりで早い転換ができる。ただ、それはこの劇場に本当に要るのだろうか。花道なんかもそうだと思うんですよ。花道なんかも本当に要るのだろうか。さらにそこに行くと、すっぽんなんかも要るのだろうかと突き詰めていくと、僕は奈落もオーケストラピットを持っていなければ奈落も要らないと思っています。奈落を中途半端に作るんだったら、立派な大道具庫を作ってもらったほうがいいかなと思っています。

大体それが中途半端になっちゃうと動線が余りよくなくて、格納場所も余り多くない奈落ができちゃうような気がするんです。それだったらどっかに割り切ったほうがいいかなとは思っています。極論かもしれないけど、僕は床機構に関しては何か目的がない限りは不要であるという感じで捉まえているということです。

○草加氏 この札幌の劇場を創るのには、伊藤さんの経験値をつぎ込んで創られたきたので、設計者に任せただけではなくて、そういう選択をして劇場を創ってきたということがよくわかりました。

そろそろ時間になりそうなので、もし会場からどなたか質問をしておきたいということがあれば、手を挙げていただければと思いますがいかがでしょうか。

○受講生 1 Y施設です。先ほどの私の回答について1点訂正させていただきたいんですけども、映像さ

ん開館当初1名おりました、すみません。2名になったのは年度の途中ということで、1名、準備室の段階から在籍しておりました。すみませんでした。

私からの質問は技術のことではなくて大変申しわけないんですが、私、Y施設で施設管理の担当をさせていただいております、先ほど避難訓練を劇場で1,500名ぐらいのお客さんを想定してされたというふうに伺ったんですけども、札幌さんには図書館とかいろんなほかの施設が入った複合的な施設でいらっしゃるんですが、そういう避難訓練のときに劇場以外の場所にもお客さんが入っていることを想定されて訓練をなさったんでしょうか。

○伊藤氏 非常に難しい質問で、こう答えるとちょっと直接的過ぎるんですけども、想定はしていませんでした。想定すると、非常に範囲が広過ぎるので、まだ僕らオープンの前だったので、余りハードルを上げ過ぎちゃうとその先に行かなくなってしまう。それをやるんだったらこっちもある、それもやるんだったらこっちもある、結局できなくなっちゃうんで、1回ちょっとハードルを下げましょうよと。

なので、今回は5階のあるところから火が出たということで、下層階のお客さんをどう逃がすかというところだけのテーマにポイントを集中しませんかと。当然それはオープンした後であれば、お客さんいるのは当然なんですけども、第2弾、第3弾、もしくは第4弾あたりで多分そういう想定でやるのかなと。

同じような複合施設は全国にもいっぱいありますので、多分そちらのほうが制度的にもっとすばらしい避難訓練コンサート、避難訓練をやっていると思いますので、それを参考にしながらちょっとやっていこうと思って、とにかくまず第一歩、それを踏み出すためにハードルをすごく下げてやってみました。

○受講生1 ありがとうございます。

○草加氏 ちょうど時間になりました。

これで、この札幌文化芸術劇場についてご紹介する講座を終わりたいと思います。伊藤さん、お忙しいところ、それから天候の荒れている中を来ていただきましてありがとうございました。

伊藤さん、もう少し残っていただけるかもしれないので、札幌と一緒に事業をやってみたいという方がいらっしゃったり、情報をもっと取りたいという方がいらしゃったら、前で名刺交換等をしていただければと思います。

では、これで技術講座の全ての講座を終わりたいと思います。ありがとうございました。